

【立川総合病院 抗血栓薬 周術期休薬期間の目安】

※記載されている休薬期間は、あくまでも「目安」です。実際は患者の状態や出血リスク、休薬による血栓のリスク等に
応じて判断をしてください。

※抜歯、白内障手術、体表の小手術、出血リスクの低い消化器内視鏡で術後出血への対応が容易な場合等は、継続下での
実施が推奨されています。

※脊椎麻酔・硬膜外麻酔・深部神経ブロックを行う際は下記休薬期間より数日長い休薬期間が必要な場合があります。

詳細は麻酔科医にご相談ください。

※通常、術後24～72時間以内に再開をしてください。薬剤によっては負荷投与を考慮してください。

分類	一般名	商品名（青字は当院採用）	術前休薬期間の目安（手術当日を含まない）	
抗 血 小 板 薬	アスピリン	ハイアスピリン錠 アスピリン アスピリン腸溶錠	休薬なしor 7日（出血リスクが高い手術の場合）	
	アスピリン・ダイアルミネート配合剤	ハファリン配合錠A81 ニトギス配合錠A81 ハッサミン配合錠A81 ファモター配合錠A81		
	アスピリン・ラソフロザール配合剤	タケルダ配合錠		
	アスピリン・ホソフロザール配合剤	キャプピリン配合錠		
	アスピリン・ クロピドグレル配合剤	コンブラピン配合錠 ロレアス配合錠	アスピリン、クロピドグレル両剤の項目を参照 （アスピリン、クロピドグレルそれぞれの処方に変更）	
	クロピドグレル硫酸塩	ブラビックス錠 クロピドグレル錠		
	プラスグレル塩酸塩	エフィエント錠、OD錠	5日	
	チクロピジン塩酸塩	エフィエント錠、OD錠 パナルジン錠、細粒 チクロピジン塩酸塩錠	7日	
	チカグレロル	ブリリント錠	7日	
	シロスタゾール	プレタールOD錠、散 シロスタゾール錠、OD錠、内服ゼリー	3日	
	イコサペント酸エチル （EPA）	エパデルS、カプセル、EMカプセル イコサペント酸エチルカプセル、 粒状カプセル	2日	
	ベラプロストナトリウム	ドルナー錠 ベラプロストNa錠 ベラサスLA錠 プロサイリン錠 ケアロードLA錠	1～7日	
	サルボグレラート塩酸塩	アンブラーグ錠、細粒 サルボグレラート塩酸塩錠	1日	
抗 凝 固 薬 ※次 ペー ジ 以 降 の 資 料 を 参 照			出血リスクの低い手術	出血リスクが中等度から高度の手術
	ダビガトランエテキシラート メタンシルホン酸塩	ブラザキサカプセル	(Cr \geq 80)：24時間 (79 \geq Cr \geq 50)：36時間 (49 \geq Cr \geq 30)：48時間	(Cr \geq 80)：48時間 (79 \geq Cr \geq 50)：72時間 (49 \geq Cr \geq 30)：96時間
	エドキサバントリ酸塩水和物	リクシアナ錠、OD錠	(Cr \geq 30)：24時間 (29 \geq Cr \geq 15)：36時間	48時間
	リバーロキサバン	イグザレルト錠、OD錠、細粒分包、 ドライシロップ小児用 リバーロキサバン錠、OD錠		
	アピキサバン	エリキウス錠		
	ワルファリンカリウム	ワーファリン錠、顆粒 ワルファリンK細粒、錠	3～5日 ※必要に応じてヘパリン置換を考慮（別紙参照）	3～5日
血 管 拡 張 薬	リマプロストアルファデクス	オパルモン錠 リマプロストアルファデクス錠	1日	
冠 血 管 拡 張 薬	ジピリダモール	ペルサンチン錠 ジピリダモール散、錠	1日	
	ジラゼブ塩酸塩	コメリアンコーワ錠 ジラゼブ塩酸塩錠	1日	
	トラピジル	トラピジル錠 ロコルナール錠	1日	
高 脂 血 症 薬	オメガ-3脂肪酸エチル	ロトリガ粒状カプセル オメガ-3脂肪酸エチル粒状カプセル	1～7日	

参考資料：2020年JCSガイドライン 冠動脈疾患における抗血栓療法 等

※T-Macss上のPDF版では薬剤名の検索が可能です。

術前休薬検討小委員会 2025年9月16日 改訂（ver.5）

出血リスク	低	中	高
一般外科領域	ヘルニア形成術、癰瘍ヘルニア形成外科手術、胆嚢摘出術、虫垂・結腸切除術、胃・小腸部分切除術、乳房手術、体表手術（膿瘍切開、皮膚小切開手術）	痔核切除術、脾臓摘出術、胃切除術、肥満手術、直腸切除術、甲状腺切除術	肝切除術、脾頭十二指腸切除術
血管外科領域	頸動脈内膜剥離術、下肢動脈バイパス術、下肢動脈内剥離術、胸部・腹部ステントグラフト内挿術（TEVAR・EVAR）、四肢切断術	開腹による腹部大動脈手術	開胸による胸部・胸腹部手術
整形外科領域	手の手術、肩・膝の関節鏡、軽度の脊椎手術	人工肩関節手術、主要な脊椎手術、膝手術（前十字靱帯、骨切り術）、足の手術	主要な人工関節手術（股関節、膝関節）、主要な外傷手術（骨盤、長骨）、高齢者の近位大腿骨骨折手術
泌尿器科領域	膀胱鏡、尿管カテーテル、尿管鏡	前立腺生検、精巣摘除術、包皮環状切除術	根治的腎摘除、腎部分切除、経皮的腎瘻増設術、経皮的碎石術、膀胱切除術、根治的前立腺切除術、経尿道的前立腺切除術（TURP）、経尿道的膀胱腫瘍切除術（TURBT）、陰茎切除術、部分精巣摘除術
胸部外科領域	肺楔状切除術、診断目的の胸腔鏡、胸壁切除術	肺葉切除術、肺全摘術、縦隔鏡検査、胸骨切開、縦隔腫瘍切除術	食道切除術、胸膜肺切除術、肺剥皮術
消化管内視鏡	上部消化管内視鏡、下部消化管内視鏡、生検を伴わない超音波内視鏡、カプセル内視鏡、内視鏡的逆行性胆管膵管造影（ERCP）、内視鏡的粘膜生検（超音波内視鏡下穿刺吸引術を除く）、バルーン内視鏡、マーキング（クリップ、高周波、点墨など）、消化管・膵管・胆管ステント留置法（事前の切開手技を伴わない）、内視鏡的乳頭バルーン拡張術	ポリペクトミー（ポリープ切除術）、充実性病変に対する超音波内視鏡下穿刺吸引術、内視鏡的消化管拡張術、内視鏡的粘膜焼灼術、経皮内視鏡的胃瘻増設術、内視鏡的食道・胃静脈瘤治療	アカラシアにおける内視鏡的消化管拡張術、内視鏡的粘膜切除術、内視鏡的粘膜下層剥離術、内視鏡的乳頭括約筋切開術、膵嚢胞病変に対する超音波内視鏡下穿刺吸引術
その他	歯科処置（抜歯、歯周外科手術、膿瘍切開、インプラント挿入）、白内障手術、気管支鏡など	気管支生検、経気管支的針吸引など	脊椎または硬膜外麻酔、腰椎穿刺、脊髄手術、頭蓋内手術、後眼房手術など

【血栓リスク（CREDO-Kyoto リスクスコア）】

JCSガイドライン 冠動脈疾患患者における抗血栓療法(2020)より

【ステント血栓症リスク因子】

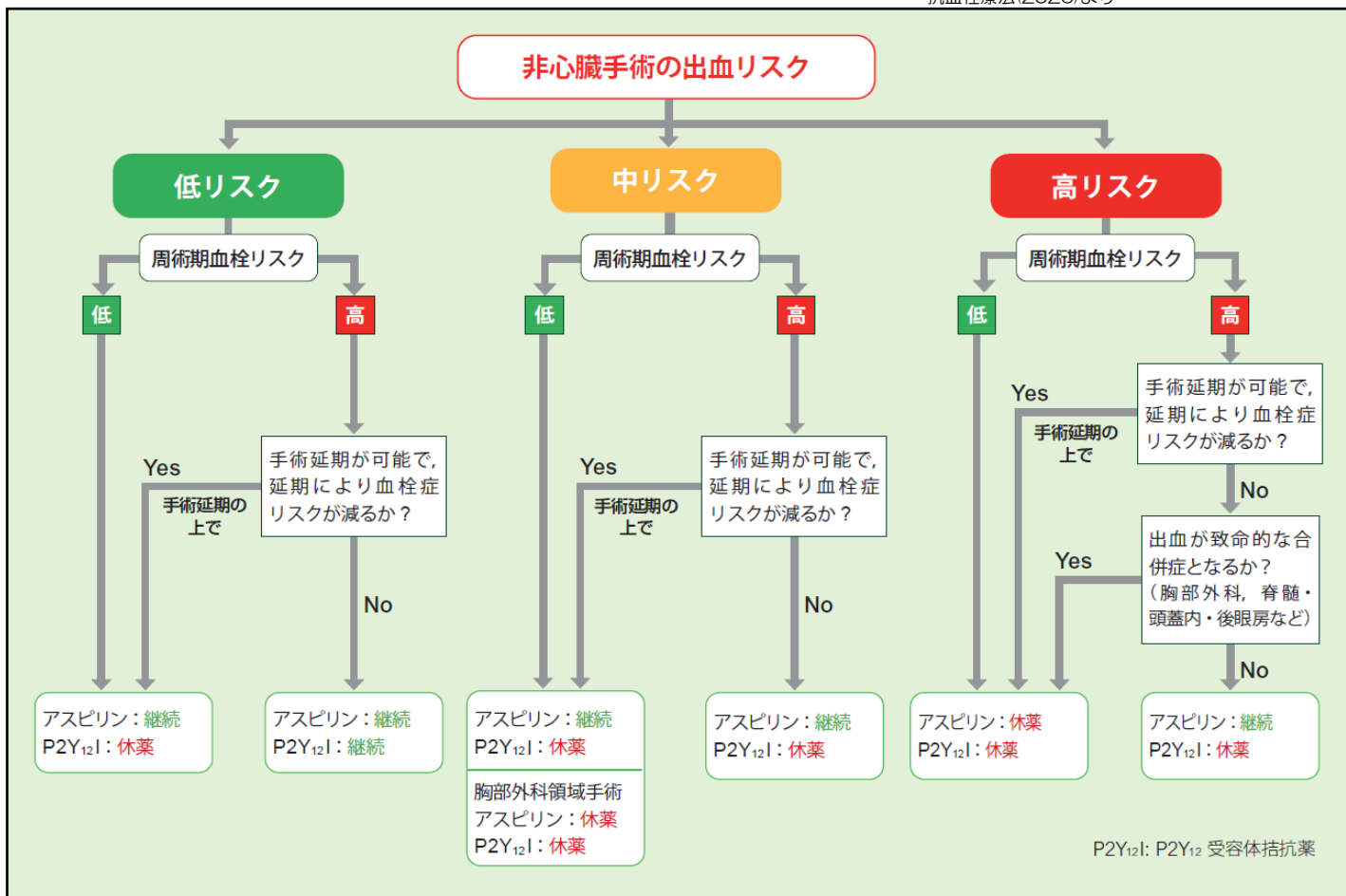
JCSガイドライン 冠動脈疾患患者における抗血栓療法(2020)より

血栓リスク（心筋梗塞・ステント血栓症・虚血性脳卒中）の予測スコア

因子	ポイント
CKD（透析または eGFR < 30 mL/分/1.73 m ² ）	2
心房細動	2
PVD	2
貧血（ヘモグロビン値 < 11 g/dL）	2
年齢（≥ 75 歳）	1
心不全	1
糖尿病	1
慢性完全閉塞（CTO）	1
スコアの範囲	0～12

0～1 ポイントを低リスク、2～3 ポイントを中リスク、4 ポイント以上を高リスクに分類

- ・第一世代のDES
- ・3本以上のステント留置
- ・3病変以上の治療
- ・分岐部2ステント
- ・総ステント長 > 60 mm
- ・SVGに対するステント
- ・DAPT治療下におけるステント血栓症の既往
- ・小血管のステント

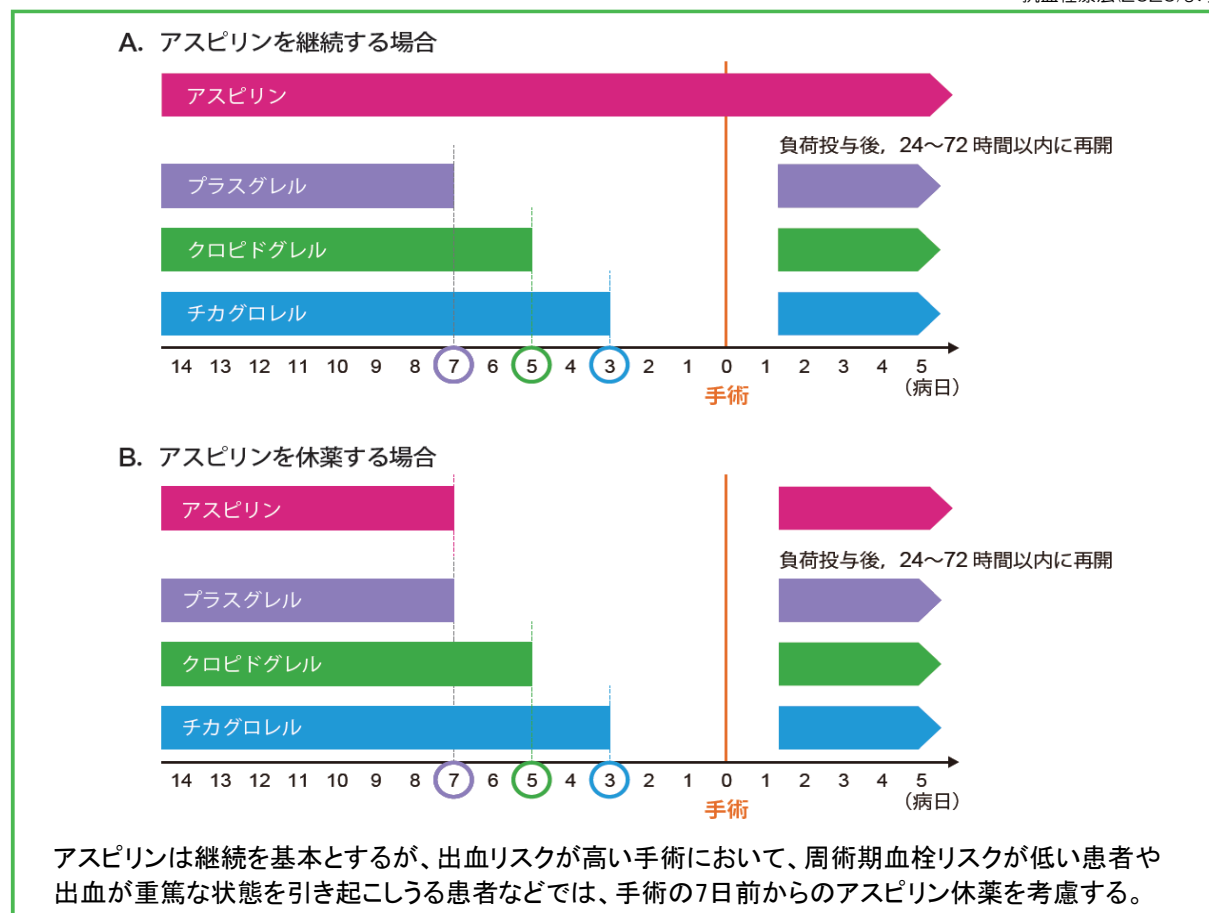


手術の出血リスクに加え、患者の出血リスクも考慮した上で判断する。

「周術期血栓リスク：高」には、推奨されるDAPT 期間中の患者も含まれる。その他、血栓リスクに関しては、前ページ等も参照。
消化管内視鏡処置に関しては、日本消化器内視鏡学会等6学会合同による「抗血栓薬服用者に対する消化管内視鏡診療ガイドライン(2012年、2017年追補)」も参照。

【待機的手術における抗血小板薬の術前の休薬時期と術後の再開時期】

JCSガイドライン 冠動脈疾患患者における
抗血栓療法(2020)より



【待期的手術における抗凝固薬の術前の休薬時期と術後の再開時期】

JCSガイドライン 冠動脈疾患患者における
抗血栓療法(2020)より

○:服用 △:手術の施行時間や患者の病状等もふまえ内服の可否を決定。術前のカッコ内は推奨される最終服薬のタイミングを表す。×:休薬

A. 出血リスクが極めて低いまたは止血が容易である手術（抜歯、体表手術など）

	5日前	4日前	3日前	2日前	1日前	手術日 (術後)	1日後	2日後	3日後
DOAC	○	○	○	○	△ (≥ 12 時間)	△ 術後 6～8 時間以降	○	○	○
ワルファリン	○	○	○	○	○	△ 術後 24 時 間以内	○	○	○

B. 出血リスクの低い手術

		5日前	4日前	3日前	2日前	1日前	手術日 (術後)	1日後	2日後	3日後
ダビガトラン	CCr ≥ 80 mL/分	○	○	○	○	△ (≥ 24 時間)	△ 術後 6～8 時間以降	○	○	○
	CCr 50～79 mL/分	○	○	○	△ (≥ 36 時間)	×*		○	○	○
	CCr 30～49 mL/分	○	○	○	△ (≥ 48 時間)	×*		○	○	○
リバーロキサバン アピキサバン エドキサバン	CCr ≥ 30 mL/分	○	○	○	○	△ (≥ 24 時間)	△ 術後 6～8 時間以降	○	○	○
	CCr 15～29 mL/分	○	○	○	△ (≥ 36 時間)	×*		○	○	○
ワルファリン		△ (> 3～5 日)	△ (> 3～5 日)	×*	×*	×*	△* 術後 24 時間 以内	○*	○*	○*

C. 出血リスクが中等度から高度の手術

		5 日前	4 日前	3 日前	2 日前	1 日前	手術日 (術後)	1 日後	2 日後	3 日後
ダビガトラン	CCr ≥ 80 mL/ 分	○	○	○	△ (≥ 48 時間)	×*	△* 術後の出血の状況に 応じて、可能な限り早期 (術後 6～8 時間以降)		△* 術後出血が問題と なる場合は 48～72 時間以降を考慮	
	CCr 50～79 mL/ 分	○	○	△ (≥ 72 時間)	×*	×*				
	CCr 30～49 mL/ 分	○	△ (≥ 96 時間)	×*	×*	×*				
リバーロキサバン, アピキサバン, エドキサバン		○	○	○	△ (≥ 48 時間)	×*				
ワルファリン		△ (> 3～5 日)	△ (> 3～5 日)	×*	×*	×*	△* 術後 24 時間 以内	○*	○*	○*

* 周術期のヘパリン代替療法は原則として推奨されない。ただし、人工弁置換術などで確実な抗凝固療法の継続が必要とされる患者では、周術期のヘパリン代替療法は考慮される可能性がある。また、術後の出血が問題となる場合には、術後の血栓塞栓症予防と容易な出血の管理を目的としてヘパリン投与が考慮される可能性はある。

【ヘパリン置換に関して】

周術期のヘパリン代替療法は原則として推奨されない。ただし、以下の場合などで確実な抗凝固療法の継続が必要とされる患者では、周術期のヘパリン代替療法を考慮する。

- ・人工弁（機械弁）置換術 ・僧帽弁狭窄症合併の心房細動
- ・血栓リスクの高い非弁膜症性心房細動（3ヶ月以内の脳梗塞既往やCHADS2スコアが非常に高い等）

また、術後の出血が問題となる場合には、術後の血栓塞栓症予防と容易な出血の管理を目的としてヘパリン投与を考慮する。

※ヘパリン置換を行う場合は以下を参照のうえ、詳細は医師の裁量にて実施する ※注射セットあり

- ・手術・処置の3～5日前（当日を含まない）からワルファリンを休薬
- ・ワルファリン休薬の2日後からを目処にヘパリンを開始
導入量：ヘパリン3000単位（3mL）静注
維持量：ヘパリン1万単位（10mL）＋生食10mL 1mL/hr（12,000単位／日）
- ・ヘパリン開始6時間後にAPTTを測定し、投与量を調節
APTT<40秒（対照値の1.5倍）： 0.2mL/hr 増量
APTT≥67秒（対照値の2.5倍）： 0.2mL/hr 減量
連日ヘパリンを投与する場合は1日2回APTTを測定し、目標値に到達後は1日1回測定
- ・当日は手術・処置の6時間前にヘパリンを中止
- ・術後24時間以内を目安にヘパリンとワルファリンを再開
術直前の維持量から再開し、3～5日継続しPT-INRが目標値に到達次第ヘパリンを中止

※ ACTは高用量投与時の指標であるため、
APTTによる投与量の調節を推奨します。
※「APTT対照値」をオーダした場合、
その値の1.5倍～2.5倍となるように調節する。